



あきまきせい

早生・多収の“秋播性”二条オオムギ新品種「こはく二条」

—二条オオムギの安定生産が難しかった中国・九州地域の高冷地での作付拡大に貢献—

暖地水田輪作研究領域

平 将人（たいら まさと）

研究の背景

主に焼酎などに利用される二条オオムギは、実需者の購入希望量が生産量より多い状況が続いており、その解決策の一つとしてこれまで二条オオムギの安定生産が難しかった中国・九州地域の高冷地での作付拡大が挙げられます。冬の寒さが厳しい高冷地では平坦地より早い時期に二条オオムギを播種して生育量を確保する必要がありますが、冬の間に生育が進み過ぎて春先の寒さで幼穂が凍死するリスクが高いことが問題になっていました。

一方、オオムギなどのムギ類には幼穂を形成するために一定期間の低温に当たる必要がある“秋播性”という性質を持つ品種があります。当グループではこの性質を導入して冬の間に幼穂や茎の生育が進み過ぎない二条オオムギ品種の育成を目指しました。

育成の経緯と品種名の由来

2013年4月に秋播性の二条オオムギ系統「西海裸72号」を母に、早生・多収の二条オオムギ品種「西海皮69号」（のちの「はるか二条」）と良品質の二条オオムギ系統「九州二条24号」とのF1を父とする人工交配を行いました。その後代から秋播性の系統を選抜し、秋播性の特性を表すために秋らしい色をした宝石である琥珀

（こはく）にちなんで「こはく二条」と命名して2023年に品種登録出願しました。

新品種「こはく二条」の特徴

「こはく二条」は、広島県の高冷地では現地で栽培されている二条オオムギ品種「サチホゴールド」と比べて茎立期（表の脚注2を参照）が遅く、凍霜害の発生が少なく、出穂期が5日遅いですが成熟期がほぼ同程度で、収量が18%多いです（表）。また、熊本県の高冷地では「はるか二条」と比べて凍霜害の発生が少なく、出穂期が2日遅いですが成熟期は2日早く、収量が15%多いです（表、図）。さらに、福岡県や栃木県の平坦地では出穂期が2～7日遅いですが成熟期は同程度で、収量が同程度～約10%多いです（データ略）。

今後の普及の見込み

「こはく二条」は2024年秋から広島県世羅郡世羅町の標高約350～450mの地域で一般の生産者による栽培が開始され、数年後に100haまで面積が拡大される予定です。また、標高約500mの熊本県阿蘇地域での適応性も検討されています。さらに、「こはく二条」は焼酎や押麦に利用することを想定して育成した品種ですが、高冷地における地域特産原料としてウイスキーの醸造に利用したいとの声もあり、中国・九州地域の高冷地を中心に今後の普及が進むことが期待されます。

▼ 表 高冷地における「こはく二条」の生育・収量特性

試験場所 ¹⁾	品種名	茎立期 ²⁾ (月・日)	凍霜害 ³⁾	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	収量 (kg/a)	収量対比 (%)
広島県世羅町	こはく二条	3.07	0.0	4.06	5.25	61.6	118
標高約420m	サチホゴールド	2.17	1.0	4.01	5.24	52.3	100
熊本県阿蘇市	こはく二条	-	0.0	4.09	5.24	45.9	115
標高約500m	はるか二条	-	1.3	4.07	5.26	40.1	100

1) 奨励品種決定調査におけるデータ。広島県のデータは2022年播きの単年度の数値。

熊本県のデータは2021、2022年播きの2か年平均値。

2) 茎が伸長を始めて2cmになった時期（茎の先端にある幼穂が地面より高い位置に出てくる時期）。この時期以降は寒さで幼穂が凍死するリスクが高まる。

3) 寒さによる葉身の黄化や枯れの発生程度を0（無）、1（微）、2（少）、3（中）、4（多）、5（甚）の6階級で評価。



▲「こはく二条」のプレスリリース記事はこちら

▲ 図 熊本県阿蘇市での「こはく二条」の生育の様子（2024年4月18日撮影）